

沢いいの登山道を歩いて...

十津川橋を渡り...

大峰山脈の...

修験道のクワイマックス感漂う大峯南奥駈道...

植林小屋から...

傾斜は...

稜線はきれいな森。笠捨山見えてきたよ。

林道を横切り...

小屋に戻す... 一件おに下山お片づけたら

小屋からLET'S GO 笠捨山。谷を渡る風すていよ。

笠捨山山頂は山また山の世界がへ。

DATA

所在地 大峯奥駈道南部、行仙岳と笠捨山間にある佐田辻 (1128m)。下北山村浦向の十津川橋から林道を絡めて3時間。白谷トンネルから林道を進み、新宮山彦ぐるーぶ補給路を歩いて、1時間で登ることもできる。

収容人数 40人

管理 通年無人。維持管理のため、小屋利用料 (2000円以上) を入り口右の志納箱へ。

水場 小屋南斜面を10分下った沢水。

トイレ 小屋に併設の外トイレあり。

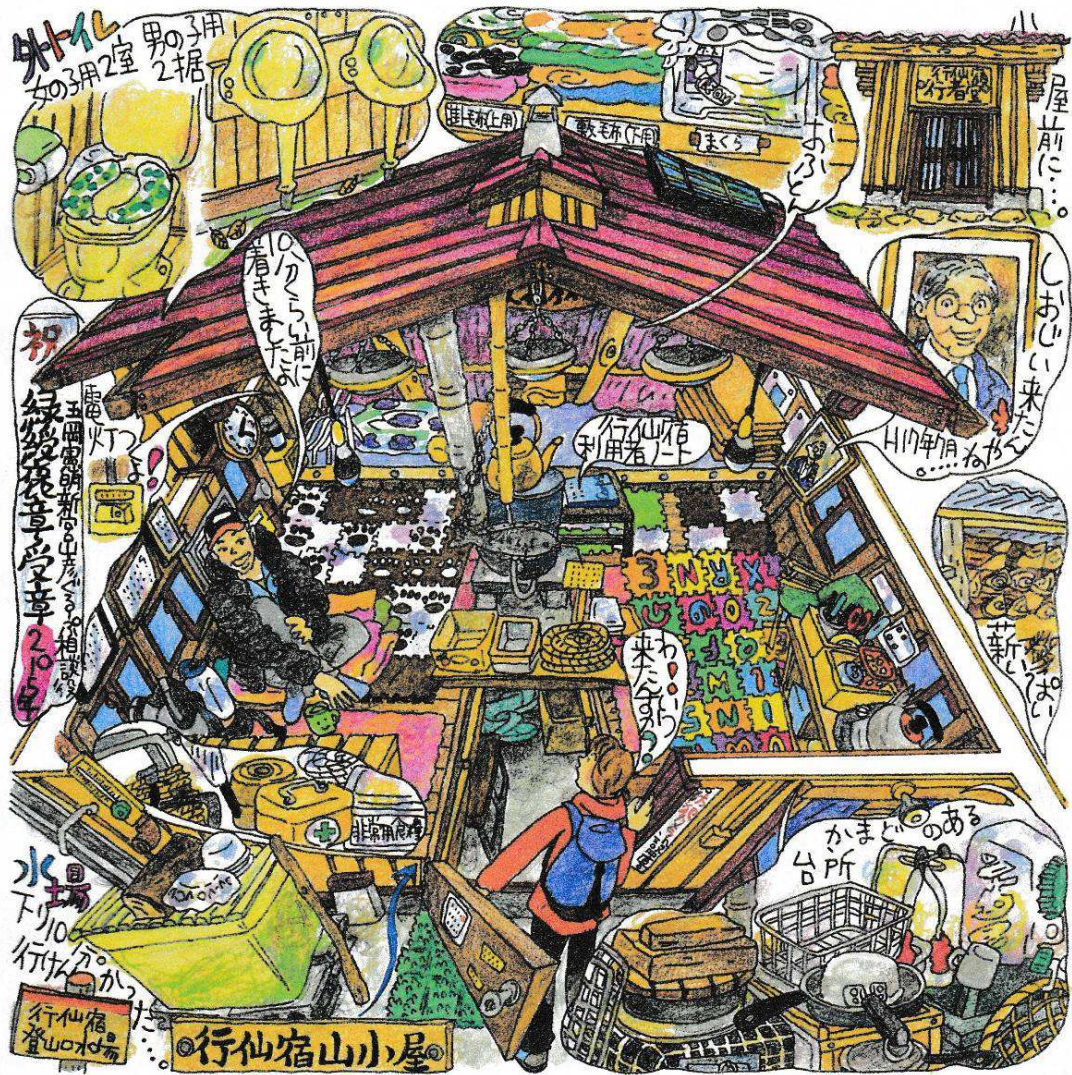
取材日 2017年11月11日

問合せ先 新宮山彦ぐるーぶ世話人沖本吉信 ☎0735-22-4558

大 峰山脈の大普賢岳に登った後、南に足を延ばして、行仙宿から笠捨山に登ることにした。大峰南部は歩いたことがない。約80kmの大峯奥駈道のなかで、釈迦ヶ岳南の太古ノ辻から玉置山を経て熊野の本宮大社までを南奥駈道と呼ぶ。40年ほど前まで、この南奥駈道は道が荒れ、修験者は太古ノ辻から下ることが多かった。この状況に、修験者のひとり、前田勇一氏が南奥駈道を再興させようと、奥駈葉衣会を発足。登山道整備をし、昭和56年に持経宿山小屋を建設した。しかし1年半後に前田氏は病死し、会は自然消滅した。

小屋の管理を引き継いだ新宮山彦ぐるーぶ (昭和49年発足) が、昭和59年から「十日刈峰行」と銘打ち数回行を行なった。足掛け3年、本宮までの道を切り拓いた後、二巡目の刈峰を行ない、その途中、玉置山から持経宿山小屋までは行程が長いので、道の再興と維持のために山小屋建設を決めた。

現在小屋がある佐田辻に小屋を建てたのは、水場や敷地、物資の補給の点から。八方から2000万円の募金を集めて、敷地造成をし、のべ956日かけて平成2年6月、小屋を完成させた。大工や職人のほかは、山彦ぐるーぶの仲間やそれ以外の協力者、合計129人が手弁当、手作業で行なった。下北山村から十津川橋を渡り、植林の中の道を歩き始めた。傾斜は緩いが、いつの間にか沢は下になっていく。崩



壊した植林小屋横で枝沢を渡ると傾斜が出てくる。アセビやアラカシの森と杉林が交互に現われ、林道から長い階段を上り、稜線に出た。シヤクナゲのトンネルを抜けると紅葉した木々の向こうに大峰南部の山々が広がった。小屋でひと休みした後、笠捨山に向かう。風に揺れるブナの木々が、ざしざしと古い木船のような音を立てる。足元の枯れ葉をかきこすと踏みながら進んだ。やがて四角い笠捨山が現われ、山頂に立つと、南に続く奥駈道のその向こうにも延々と山が連なっていた。小屋に戻ると、米沢さんという男性がくつろいでいた。この日はここに泊まるのだと言う。奥駈道を歩くのは5回目。今回は熊野まで歩いた後、往復して吉野まで戻ると話した。前にも一度往復したそうだが、「行きと帰りで、山は全然姿を変えますよ」と話した。南奥駈道は、前日訪れた大普賢岳とは雰囲気の違い、寂しさが漂う、静かな山だった。そうそう、笠捨山は、西行法師があまりの寂しさに笠を捨て逃げたことからこの名がついたそうだ。